



ジオラの泉



ここは森の奥の小さな泉。

年に一度、ジオラの妖精たちの代表が集まり妖精サミットが開かれます。

妖精たちのにぎやかな話し声が聞こえてきます。

どんなお話をしているのでしょうか。

少しのぞいてみましょう。



妖精たちが、机を囲んで話し合っている声が聞こえてきます。
短髪がアルト、長髪がアラッチェ、一つ結びがスミレです。

「今年の花祭りはどうする？」

「ペールとティナなんてどうかしら。」

「もう仲良いじゃん！もっと結びがいあるのにしよーよー！」

花祭りでの彼女たちのお仕事は、村の若い少年少女を
結び、次の世代を創ること。

誰と誰を結ぶのか、今年も会議は難航しているようです。



妖精たちは街に出かけてみることにしました。
寝静まった街で、1つだけ灯りがついています。

「こんな夜更けに起きている子がいるわ」
「行ってみようよ！」

妖精たちは灯りのもれている窓に向かって飛んでいきました。



妖精たちがこっそり部屋を覗くと、一人の少女が机に向かっていました。
少女は白い便せんに文字を書いては消し、丸めて紙くずにして、新しい便せん
を取り出すことをくり返しています。

「ねーねー、何書いてるのかな」

「しっ！見つかっちゃうよ」

アルトが騒ぐのを、スマレがたしなめます。

「聞いてみましょうか」

ブラッチェの合図で三人は少女の元に舞い降りました。



「こんばんは」

「えっ・・・よ、妖精、さん？」

「何を書いてるんですか？」

少女は手元の便せんを手で覆って頬を染めました。
ブラッチェがすかさず指の隙間からそれを覗きます。

「ラブレターですか？」

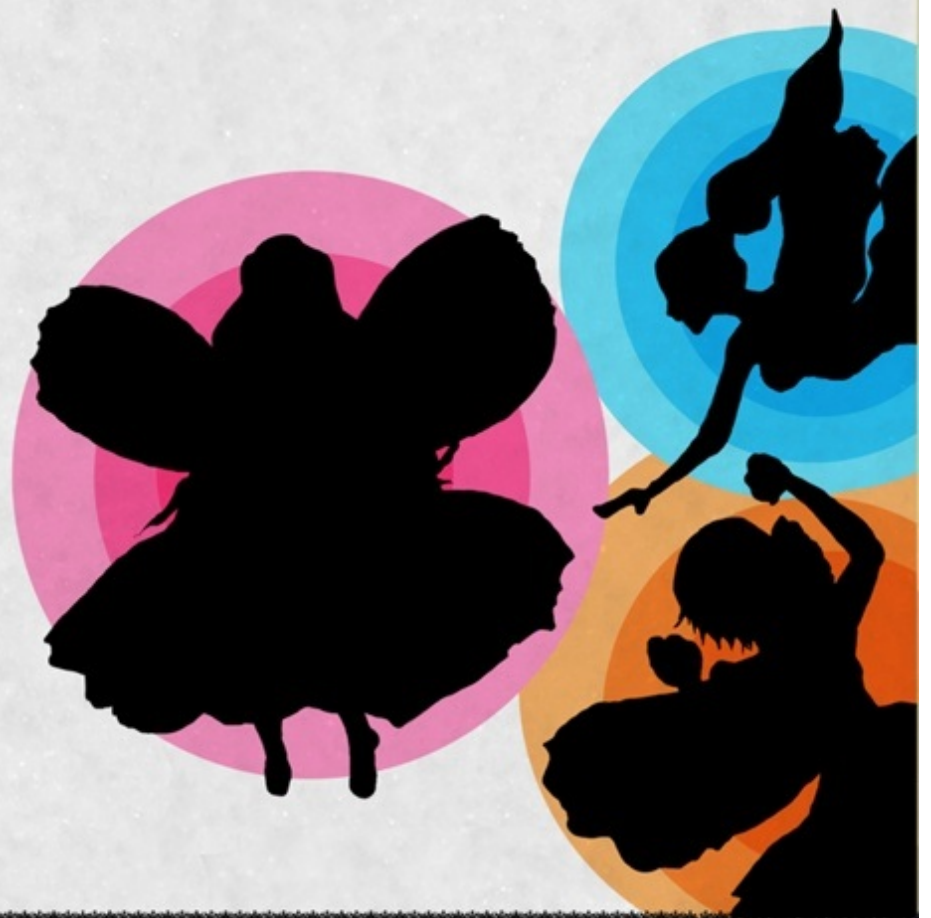
少女は更に頬を染めてうつむきました。

「はい。・・・きっと、渡せないけど」

「どうして？」

「だって、私なんかがあんなすてきな人に」

悲しげに目を伏せる少女の前に、残りの2人が飛び出してきました。



「花祭のメインは決まったわね」

「あたしたちの出番だ！」

三人の妖精は少女に笑みを向けました。

「私たちは豊稷の泉の妖精三姉妹。必ずあなたの恋を叶えるわ」

「あなたたちが？」

その日から妖精たちは少女シーラのために着々と準備を始めることにしました。



ブラッチェは絹の国に出かけ、ドレスにぴったりの素敵な布を分けてもらいます。
絹の花はブラッチェの古くからの友人で、気前よく布を譲ってくれました。

「ブラッチェ、この布はどう？華やかでドレスにはもってこいだよ」
「そうね、でもこっちの淡いクリーム色なんてどうかしら。シーラの柔らかさが出るわね。」

ブラッチェは淡いクリーム色の布を選び、絹の花にお礼を言いました。



アルトはお野菜の国に出かけて行きました。

お野菜たちは朝露をまとってきらきらしながらアルトを出迎えます。

「アルト！アルトだー！」

「どうしたの、久しぶりじゃない」

「わーい！みんな久しぶりー！今日はね、シーラのためにみんなに協力してもらいに来たの！」

アルトのお願いなら喜んで、とお野菜たちは競ってアルトの後をついていきました。



スミレは紅の里に行きました。

「紅さん、こんにちは。」

「おやスミレちゃん、珍しいわね」

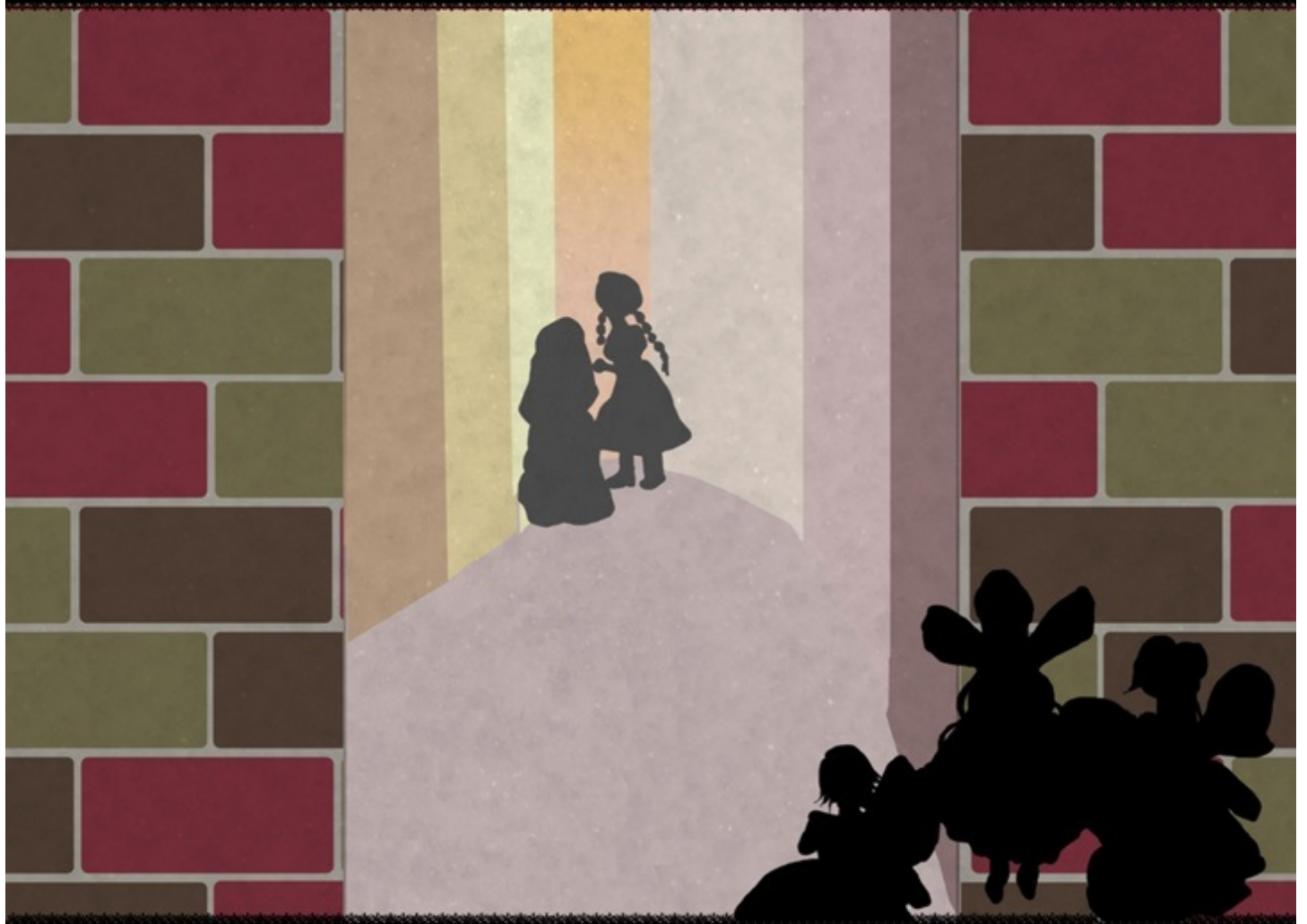
「あのね、少し紅さんの紅を分けてもらえない？」

「いいわよ。スミレちゃん、もしかして。すきな人でもできた？」

紅さんがおどけて言うのに対し、スミレは紅さんくらい真っ赤になりながら言い返します。

「違うよ！シーラって女の子のため！」

ふーん、とつまらなそうにする紅さんにお礼を言い、スミレは夕暮れの空に飛んでやきました。



「見てー！お野菜さんこんなについてきてくれたんだよ！すごいでしょー！」

「私だって紅さんにこんなにいい紅貰ったよ」

「まあまあ、二人とも頑張ったわね」

妖精たちがお喋りしながら飛んでいると、シーラの姿が見えました。

シーラはお年寄りのお買い物を手伝ってあげていました。

「それ、重いから持ちます」

「悪いねえ」

妖精たちは顔を見合わせ、大きく頷きました。

「絶対叶えてあげようね」



とうとう収穫祭の日がやってきました。
お気に入りのワンピースにいつものおさげで向かったシーラは足を止めます。

そこには憧れの少年の姿が。
しかし彼の周りには女の子たちが集っています。
少年はシーラに気づいて手を振ってくれましたが、シーラは踵を返してしまいました。

「みんな可愛い。私なんてやっぱり、場違いだわ」



「「「待って！」」」

シーラを呼びとめたのは、あの妖精たちでした。

「言ったでしょ？必ず恋を成就させるって」

妖精たちはそう言って手を高くあげ、互いの手に触れました。

するとクリーム色の絹の布がドレスになってシーラの体を覆い、

紅が唇や指先、頬を鮮やかに色どり、野菜たちが肌に吸い込まれ、みずみずしさをもたらししました。

見違えるほど美しくなったシーラに三人は言います。

「彼のところに行きなさい！」

シーラはこくりと頷くと、広場に向かって走って行きました。



今、森の深く深くにあるあの泉には、小さな小さなお城があります。
昔々、シーラという娘が愛する人と共に建てたというお城です。

ここには三人の妖精が住み、気まぐれに訪れた乙女たちの恋を叶えているそうです。

お城からは今日も、楽しげな笑い声が聞こえます。

Fin